CHRISTIAN CLASSICS
NO. 3

NOTES ON EXODUS
BY C. H. M.

出エジプト記講義

クリスチャン古典シリーズ第三集

C・H・マッキントシ著

山岸　登訳

出エジプト記講義

NOTES ON EXODUS

BY C. H. MACKINTOSH

目次

はじめに……一
第一章……八
第二章一―一〇節……一七
第二章一一―二五節……二六
第三章……四六
第四章……七五
第五章―第六章……九八
第七章―第一一章……一一八
第一一章―第一二章……一三三

第一三章……一九五
第一四章……二〇六
第一五章……二一八
第一六章……二四六
第一七章……二六七
第一八章……二八三
第一九章……二九四
第二〇章……三〇三
第二一章―第二三章……三二四
第二四章……三三四
第二五章……三三八
第二六章……三五三
第二七章……三七〇
第二八章―第二九章……三七七

第三〇章……三九四
第三一章……四一〇
第三二章……四一八
第三三章―第三四章……四二八
第三五章―第四〇章……四三四

はじめに

私は、この講義を読んで、神のみことばの中の最も示唆に富む、興味深い部分を学んだ。

この中では、血による贖いということが、主要な部分を占めている。それが、この書の特徴である。神がご自分の贖われた民に示される御力、愛による忍耐、恵みの富などの多くの恩寵は、すべてそれから出て来る。イスラエルと神との関係という大問題は、子羊の血によって解決された。それは、彼らの身分を全く変えてしまった。両側の柱に血の塗られた戸の内にいるイスラエルは、神に贖われた、血によって買われた民であった。

神は聖であり、イスラエルは罪に汚れていた。だから裁きが完了されるまで、この両者の間には、幸いな交わりがあり得なかった。罪は裁かれねばならなかった。かつて神と人との間には、潔白を土台とした幸いな交わりが存在していた。しかし罪が間に入ってきて、その連鎖を断ち切ってしまったので、その両者の間には、平和がなくなってしまった。ただ、罪に対する神の聖なる裁きがあらわされてのちに初めて、私たちは「死によっていのち」を持つことができる。神は聖い神である。そして神は罪を罰さなければならない。神は罪人の罪を裁いてから、その罪人を救われる。十

字架はこのことの完全な、そして十分なあらわれである。

雛型として、このことが、「最初の月、十四日の夕方」の大問題である。すなわち、神の聖さが罪に定めた人々を、神はどのようにして裁きから救い、恵みの中に受け入れることができるか、ということである。この最も厳粛な問いに対する答えのうち、聖なる神が満足しうるものは、ただ一つしかない。それは、神ご自身が備えてくださった子羊の血だけである。「わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう」(一二・13)。これがその全く重要な問題の解決であった。それは、生か死か、解放か裁きかの問題であった。戸口の両側の柱に塗られた血は、聖さの全要求と、会衆の全必要に対する完全な答えであった。神は栄光を受けられ、罪は裁かれて取り除かれた。イスラエルは子羊の血によって救われた。

幸いな真理よ。イスラエルの民はなお、死と裁きの地であるエジプトにいたけれど、神と平和な関係に入れられた、幸いな、救われた、そして守られた民族となった。今や神は、イスラエルの民を解放しなければならない立場に立たされた。これはキリストの御血を信頼するすべての者の完全な安全性の、貴重な型である。「真夜中になって、主はエジプトの地のすべての初子を、王座に着くパロの初子から、地下牢にいる捕虜の初子に至るまで、また、すべての家畜の初子をも打たれた。それで、その夜、パロやその家臣および全エジプトが起き上がった。そして、エジプトには激